

米中（サンフランシスコ・蘭州）事情： 「話せば分かるは無理」そして「失敗を恐れるな」



海外交流

谷本親伯*

Affairs in San Francisco and Ranzhou : Disappointment and Encouragement

Key Words : Osaka University San Francisco Center for Education & Research;
Organizational friendship; First ambassador ship; Kanrin-maru; Inspector Oguri Kouzukenosuke;
Comfort woman statue; Lanzhou University; Promising Chinese students

大阪大学サンフランシスコ教育研究センター長として赴任したのは2007年4月から2010年3月までである。この時、本職とともに北カルフォルニア日本商工会議所の役員を引き受け、京セラの稲森会長や藤崎駐米大使、長嶺安政 SF 総領事（現駐韓大使）、ジャーナリストの松尾文夫氏、また小栗上野介菩提寺村上泰賢住職など多彩な人々と触れ合う機会を得た。毎月の講演会を担当した役得であった。

松尾文夫氏は、今年逝去され、新聞の訃報記事にその精力的な活動が述べられていた。共同通信社ワシントン支局長時代から取り組まれた「民主主義を標榜しながらアメリカは何故銃を持つのか」、この課題に国の成り立ちから現在までの歴史を図書・記事を通して解説されていた。「銃を持つ民主主義 (Democracy with a Gun)」(小学館刊) は、邦文・英文の両方で出版されている。氏の SF 訪問時に、何度か会食させていただいた。

咸臨丸（勝海舟艦長）が SF に寄港したのは1860年である。咸臨丸は、当時の黒船の一員であった蒸気フリゲート艦「ポウハッタン号」が日本初の遣米外交代表団を運び、その随行船として派遣された。が、

日本人乗組員の本格的な外洋航行は未経験であり、経験のある米人船員が操船したと記録されている。また、勝自身は船酔いが酷く乗船後殆ど部屋を出なかったとも述べられている。使節団正使新見豊前守以下77名がポウハッタン号にて横浜を出帆したのは1860年2月13日であり、SFに直行する予定が嵐や時化に遭ったため破損し、途中燃料不足も重なって同3月6日、ホノルルへの入港を余儀なくされた。12日間滞在后、同3月30日に金門海峡（ちなみに金門橋は1933年に架橋工事着手）を通り、SFに辿り着いた。一方、咸臨丸は、1860年2月4日、品川沖を出帆後、SFに直行しているが、途中で大暴風雨に遭遇し、満身創痍で3月18日にSF入港を果たしている。別々に動き何のための随行船であったのか、よく分からないが、38日間の太平洋横断であった。筆者が2007年7月にPan-Pacific Raceに参加する直前の69フィートのヨット「夢ひょうたん号」（定員12名、時の乗員4名）に便乗してSFからLAまで帆走するのに50時間程度（速度20ノット）だった。太平洋横断38日というのは当時の帆船とその動力を考えると意外と短かったのではないかと。

ちなみに、1962年、海洋冒険家（ソロセーラー）の堀江謙一氏が24歳の時、淡路島を出港し「マーマイド号」を操って単独太平洋横断航海を成功させている。この快挙は世界的に伝えられた。5月12日に出発し、SFに8月12日に到着している。丁度3か月間の航海であった。「夢ひょうたん号」が到着した際、SFヨットクラブの粋な計らいで、45年前に堀江謙一氏が係留した場所に停泊させている。

さて、小栗上野介が遣米使節団の監察官として果たした役割は大きい。開国直前の外交音痴により発生していた日米通商条約締結で生じた金銀交換率（条約では金：銀が1：5、通常は1：20だから、日本に銀を持ち込めば金は4倍になった）の是正のためワ



* Chikaosa TANIMOTO

1943年12月生まれ
1970年京都大学大学院工学研究科（資源工学専攻）修士課程修了
1976—1997年京都大学工学部土木工学教室勤務（助手・講師・助教授）、工学博士
1997年10月大阪大学大学院工学研究科教授（地球総合工学専攻）
2007年4月—2010年3月、国立大学初の海外拠点・大阪大学サンフランシスコ教育研究センター長
現在、榎原考古学研究所特別指導研究員、中国敦煌研究院名誉フェロー
TEL : 078-811-8367
FAX : 078-811-8913
E-mail : tanimotochikaosa@gmail.com

シントンで粘り強く交渉した事、あるいは、株式会社制度を正しく理解して先方を驚かせたことなど特筆すべきことが多々あるが、帰国後、日本で初となる横須賀製鉄所（造船時のドックも兼ねていたので日本初のドックであり、現在、土木遺産として扱われている）を建造したことは、村上住職の講演を聴くまで筆者は知らなかった。

また、特筆すべき事として、福沢諭吉が咸臨丸に乗船していて、SFにて写真屋の娘と親しくなり、ツーショットを撮っている。彼はこのことを隠していてSFを離れてから仲間にその写真を見せた。この辺のくだりが、大阪大学出版会第1号である「福沢諭吉と写真屋の娘」（中沢昌雄著）に述べられている。なお、彼の名誉のために、初めての海外で最初にすることがWebsterの辞書の購入であったことを断っておきたい。

筆者のSF赴任最終年が2010年で咸臨丸寄港150周年に当たり、日系関係者・商工会議所を中心に記念事業を企画し鋭意準備に協力した。咸臨丸係留地点を示す銘盤をEmbarcaderoの歩道に設置したのは小生の汗の結晶である。使節団通訳の一員であった中浜（ジョン）万次郎の子孫や咸臨丸に縁のあった米国関係者の家族を招き、パーティーを開いている。この事業を推進するために行った明治維新周辺の日米外交事情に関する図書・文献の確認は楽しい作業でもあった。

さて、上記のような日系が音頭をとる日米交流の動きには、現在でも当然SF市関係者の協力が必要で、商工会議所での打ち合わせには、常時、市長参加が出席してくれていた。ところが、数年前、韓国系団体がSF在中国系組織を巻き込んで仕掛けた慰安婦像が市の中心部に設置され、これが原因で1957年以来順調に進展してきた大阪・SF両市の姉妹都市関係がご破算になった。なぜ、慰安婦像がSFに設置されたか、筆者はその経緯を現地のメディア情報から探ってみた。特に、KQEDなる地元TV局が徹底的に調査し、ウェブサイトにも報告している。かなり膨大な量である。日本では、なぜか報道されていないので敢えてここに記す。

日本が大人ぶって韓国の仕掛（言い分）に反論しないことを利用し、いつの間にか、1980年代にSF市長も務めた大物上院議員（ダイアン・ファインスタイン女史）のSF地元オフィス事務局長（中国系

米人）がSF市の進める「街路に美術品を展示する運動」に便乗し意図的に慰安婦像を美術品として扱ってしまった。（これ先般の名古屋「あいちトリエンナーレ2019」での出来事と共通している。）もちろん、韓国系組織が強く運動した結果である。加えて、この時のSF市長は中国系であり、日系の票よりも中国系・韓国系の方がはるかに多い。

参考までに記す。1983年8月31日、亡命中のフィリピン人ベニクト・アキノ氏が離米し、マニラ空港に到着直後に警察に拘束され、時間を置かず空港内を移動中に射殺されている。米国ではこの可能性が強く懸念されていた。そして、当時SF市長であったDF女史は即刻、マニラ市との友好姉妹都市締結を破棄した。筆者は、この様子をSFのカフェのTV画面で見守っていたので鮮明に記憶している。

慰安婦像に戻す。日系団体がようやく腰を上げ、提訴に及んだが、連邦裁判所では、「両国間で解決すべき問題であり、第三国である米国内に持ち込むべきことではない。今後このような提訴には応じない。」ときっぱりと断られている。慰安婦像を海外で設置しようとする団体の最終目的は、「買売春の世界的撲滅だ」と称しつつ、巧妙に意図して日本を標的にしているのである。しかしながら、大人ぶって放置しておく、結果的に日本が不利になるだけであろう。

そして、KQEDの報道と共に、Japan Business Pressがインターネットにて次のように伝えている。「司法当局から中国政府のスパイと断じられた中国系米国人が、米国での慰安婦問題追求の枢要な役割を果たしていることが判明した。そして、2018年8月5日、連邦議会上院のダイアン・ファインスタイン議員（民主党・カリフォルニア州選出）が突然次のような声明を発表した『5年前、FBI（連邦捜査局）から私の補佐官の一人が中国諜報機関にひそかに情報を提供し、中国の対米秘密工作に協力していると通告を受けた。独自調査も行った結果、すぐに解雇した。機密漏れの実害は無かった。』この解雇された人物は、現在、SFに本部を置く「社会正義教育財団」の事務局長として活動していると米国メディアにより伝えられている。」

こういう事態を受けて慰安婦像問題への直接的な対応ではなく、SF・大阪両市民の親善友好関係維持のために、何らかの討論が必要だろうと思ひ、

SF 日系団体や交流のある現地大学関係者に呼びかけ、「戦争犯罪と一般市民の犠牲」に関する公開講演会を SF で開催する企画を提案したが、米国内での「原爆投下問題」の取り扱いが今尚非常に微妙なものであり、空中分解してしまった。オバマ大統領が現職後半時に広島を訪問し、献花と共に感動的なスピーチを行ったことは、米国では我々日本人が想像するよりももっともって特別であったようだ。

さて、話は変わる。筆者は御蔭様で4分の3世紀を生き延び、厳しい年金生活に浸ることを強られる毎日であるが、一日中TVの前に居ることと書斎に居て気がつけば朝陽が差してきたことを感じる生活が交互にやってくる。ほぼ年2回くらいの頻度で中国に招かれている。敦煌研究院や教え子が所長に就任した中国文化遺産保存研究所（北京）から声がかかり、国際岩の力学学会（ISRM）で取り組んできた石造遺跡の保存に関する研究を支援している。

明日より10日間、蘭州大学にて集中講義を行い、また、11月初旬には、特に若手研究者を対象とする「岩土遺跡の保存に関する国際会議」に参加する。こういったことに至るまで、阪大現職時代に学生諸君とともに毎年1～2回、中国で行った日中合同調査研究が大いに役立っている。

ある時、敦煌の夜店で気紛れに石片を買い研究室の印鑑を頼んだら、なんと研究の「研」には「石偏」に「開」が一体となった字に刻まれていた。「ム、ム、ム、なんと、硬い石を開く（＝見えない物の中身を知る）ことが研究か」と大変印象に残っている。市中から莫高窟に至る三危山（三蔵法師が3回死にかけたことに由来）の眺望が懐かしい。

現在、筆者が関係し日中間で取り組んでいる石造遺産は2つあり、ひとつは重慶から西方180 kmにある「大足石刻群」である。1999年に世界遺産に登録された晩唐・五代・北宋時代にかけて精緻に刻まれ色彩鮮やかな「5万體および10万面の彫刻群」である。実に繊細で素晴らしい石工の技を感じる場所であるが、日本人の訪問は少ない。中心となる高さ6m、幅8mの千手観音像は、均質な砂岩の崖面を研磨しその表面に漆を5層に塗布し、そして金箔で覆ったものである。筆者の判断では、岩体背面からの浸透水が1000年以上にわたり作用し続けた結果と見ている。15年をかけた修復が最近完成した。

現地では、PM5を含み、大気観測の調査や石材の風化劣化の実情とその原因究明に当たっている。

もう一つの現場は、北京から北方約240 km、昔、熱河と言っていた承徳市にある。清朝を築いた当初3代の皇帝が約100年をかけて建造した「承徳避暑山荘と周辺施設」（1994年世界遺産登録）である。建物の構造に関する問題は解決しているが、膨大な石材を必要とし完成を急いだためか、粗悪な石材も使用されていることから特に火山性の角礫凝灰岩に顕著な凍結膨張現象による破損が多発している。建物基壇・円柱・獅子や象の対像・門構えといった部分が無惨に破損している。現在、若手研究者や技術者・職人が石材の周辺や内部を観察しながら地道に根気よく修復作業を続けている。こういった人々と一段区切りの付いた時に「仕事の仕上げ」で交わす白酒の乾杯の嵐に付き合いたいものの医者からアルコールフリーを指示される我が体調を気にしている今日この頃である。

ここまで書き上げてそのまま閑空から蘭州に向かった。蘭州大学の地質・土木工学部門にて大学院生を対象に1週間の集中講義を行うためであった。岩石力学とトンネル工学に関する講義であり、最後の日には、遺跡保存、特に石造遺跡の風化・劣化問題を講じた。遺跡保存問題は、境界領域分野であるが、新しく「遺産科学（Heritage Science）」と称しつつある。毎日、4時間近い講義となり、夜10時過ぎまで学生と時間を共にした。この時の見聞を伝えたい。

まず、蘭州大学は、1909年に創立され今年110年記念の年を迎えている。データは2010年のものだから少し古いだが、教職員数4,221名、中国人学生数28,358名で、中国全土に605校の大学がある中で、上位30校に入っている。（2010年時点で28位。その後、中核となる大学95校が指名され、蘭州大学への沿海地区の若者の入学が急増し、評判は大幅に向上していると思われる。学生・教職員数も2019年では20～30%増加している模様。）甘肅法政学院と並んで甘肅省を代表する大学である。また、甘肅省以西の新疆ウイグル地区や青海省・チベット地区には蘭州大学並みの高等教育機関は無く、蘭州大学が広大な中国西域の教育の中心となっている。因みに、中国の行政地区は、31区あり、22省と4つの特別区（北京市・上海市・天津市・重慶市）、そ

の他（自治区・香港やマカオなどの特別行政区、そして公称上台湾）である。

発足後、何度か改称され、1949年の現在の中国の建国時に、国立蘭州大学から蘭州大学となっている。1953年に全国重点大学となり、医学系や物理系・放射線化学・草原生体研究等の分野を統合して総合大学となっている。現在、18学部がある。蘭州市の中心部に位置し、鉄道駅から徒歩にて10分くらいの場所であるが、一步門を潜ると広大なキャンパスは、整然と清掃が行き渡り、路上にゴミを見たことが無かった。随所に公園とベンチが設置され、子連れの散策者も見られた。大阪大学の吹田キャンパスと似た雰囲気があり、大学の雰囲気としては申し分が無い。

小生の講義は、Rock Mechanics & Engineeringと題し、岩石物性や強度試験、現地調査、結果の解釈方法、地質分類、トンネル工学、そして地下水挙動等を中心とする遺産科学の基礎概念に焦点を当てた。小生は、中国語は全然駄目で、習得するいい機会を逸してきたので、全部英語に頼った。そのため、誤解を最小限に留めるため、5科目で600ページを超えるテキストを準備し、前日の講義内容について翌日にキーワードを復習するなどかなりゆったりと時間をかけた。1回4時間などすぐに経過してしまった。よく理解できていないと思われる場合、漢字で表現することも試みた。講義内容の応用分野は、特に土木工学の範疇では、ダム・トンネル・橋梁下部工（基礎）・鉄道・道路等社会基盤であるが、岩石力学やトンネル理論はかなり特殊な分野である。受講生は、当初26名、3日目に21名となり、最終講義を終えた時点では17名になっていた。日本の学生と同様になかなか質問が出ない。シャイな部分があるのと正規の時間中の質問を避け、講義修了後に尋ねてくることが多い。「質問が無いということは、全部理解できたというのか、全然わからなかったかのどちらかだ。遠慮せず尋ねて欲しい。一方的に講義するのは避けたい。」と繰り返した。やり取りしているうちにだんだん気が付いてきたのだが、英語での表現や専門用語に慣れていないことに辿り着いた。時間がかかってもこれに対処すべきと判断し、パワーポイントスライドとテキストを確認しつつ板書した。この点は日中共通する傾向である。英語での講義は、教師および学生両者の慣れが不可欠であ

る。

力学系分野では、応力・ひずみ関係が基礎となる。Theory of Elasticityにまで言及して、なぜ「鉛直応力」と「せん断応力」の区別が必要となるのか、学生に質問をぶっつけてみた。日本でも先ずこんな質問はしないのだが、敢えてやってみた。すると質問が一番少なかった学生が、小さな声で「Deformationです。」と答えた。「トエ（対）、分かっているじゃないの」とうれしくなってきた。

また、筆者の大学院生時代、昭和44年は東大が学生運動の余波で全学1年間休学し、東大教授がわが校で特別講義を開くことが結構あった。FEMの公開講座などでも著名な教授が来学し、東大ではこういうふうに教えているのかと何度も感心したことがある。その中で、「変分原理」を教えておられた鷲津久一郎先生が、FEM日米フォーラムで、アポロ11号のプロジェクトの中核をなした米国教授などとのやり取りの中で一生記憶に残していることがあった。1969年のことである。コンピュータの発展によりだんだんと複雑なプログラムが開発され、ブラックボックスと化すことが多くなってきている。FEMも使用法は分かっているでも答えが正しいと判断できる術を知らず、例え間違っているでも気が付かないということが多発する危険性がある。教育的にどうすればいいのかという興味あるやり取りがあった。この問いに答えて、米国側のリーダー的な存在であったGallager教授が“Garbage-in, garbage-out (GIGO)”と答えたのが耳に焼き付いている。

丁度25年前、三峡ダム工事現場を訪れた時、ダムの上流・下流側での175mの水位差を克服するため航行船舶用の5段の閘門水路が工事中であった。小生の経験では少し急斜面過ぎたので、岩盤物性はどのような数字でしょうか、と尋ねた処、設計担当技師が「FEMで計算したからなにも問題はない」という答えに終始して議論にならなかったことを思い出し、荷重-応力-歪-変位の関係を説明する際に突然FEMの考え方に切り替え、マトリックス計算を板書した。日本でもFEMの原理を説明することはまずない。プログラムがそこに在って当然と思っている人がほとんどである。「場」の定義から始めてまるで構造力学の講義の感を呈したが、意外にも学生には好評であった。どうかGIGOにはよく注意して欲しいということが伝わったと感じた。日

ごとに食いつきがよくなったというのが筆者の印象である。

大学の研究室は、23:30に閉められる。夕食後、学生たちは少し休憩するかと思ったが、学生食堂で夕食を摂った後、すぐに研究室に戻り就学している。研究室は、学生一人の専有面積が、幅70cmくらいで1列の机に対し14名が隔壁の両側に座っている。1室56名であった。空いている席はほとんど無し。また、研究室と言い、いくつかある図書館での雰囲気と言い、まるで私語が無く気味が悪いほどの静寂が漂っていたのが強く印象に残っている。日本とはかなり異なると言わざるを得ない。

帰国する日の朝、サプライズがあった。8名の学生が大学の絵葉書に各自がメッセージを記し、もう一度講義が聴きたいので再訪して欲しいという希望を寄せてきた。最初の講義には、工学部長（土木工学専門）も聴講してくれていたもので、帰国後礼状を送った処、11月上旬に大足市（重慶西方180km）での国際会議に出るそうだが、その帰りに再び寄って欲しいということになり、2日間、講義の追加を行うことになった。大変うれしく思っている。

また、滞在中の夕食の大半は学生食堂で摂ったので、学生たちにおごってもらうことになった。その理由は、学内では一切現金の動きはなく、食堂の支払いも専用カードのみ。メニューも多彩ですべて堪能できた。中国でのQRカードの普及は目覚ましい。なんでも支払いはこれである。市中のレストランも、小さな雑貨屋も、タクシーも一切がQRカード処理。特に、食べ物を扱う店では衛生面で安心できる。実に便利であり、日本も早晚このようになるであろう。間違ふことがあるのではないかと懸念されるが、これだけ便利なのだから、問題が発生すればその時に対処すればいいのだと実にポジティブに受け留められている。滞在中、最後の日の3時間の自由時間中に、甘肅省博物館を訪問したが、ここの入館もQRカードが使用されていた。これが無ければ中国では生活できない。公衆トイレもQRカードが必要となるとわれわれ訪問者はどうすればいいのだろう。

それから、蘭州市中で気付いたことで、食物に携る人たちがすべて透明の特殊マスクを着用していたことが挙げられる。通常の布製のマスクではなく、下側から受けるように着用し、唾が食べ物にかからない対策が取られていた。日本では見かけない。

ホテルから駅までの散策中に、大通りではすでに完了し、少し入った路上で電線の地下工事が盛んにおこなわれていた。国慶節70周年祝賀行事と関係があるのか、急ピッチでの工事であった。仕事柄興味を以って見守った。無電柱化というべきか、電線の地下敷設化については、日本は他国に後れを取っており、ロンドン・ニューヨークが100%、北京90%、ソウル49%に比べて、東京8%、大阪6%といった現状である。日本は地下水位が高く、地下化は漏電や腐食の面から好ましくないといった理由が上げられているが、どうも「やる気」の問題ではないかと思われる。原子力が一番安いと標榜しながら、311事故による福島の大規模な被災の莫大な損失、あるいは日本の電気は「質が良い」ので高くつくといった理由が通用していたようであるが、利益を電柱の地下化に向けるとか、日常の努力が薄いようにも感じる。最近の台風被害による千葉の停電後の対応でも電力会社のPreparednessが問われる処であろう。

もう一つ、付け加えておきたい。蘭州駅から伸びる幹線道路沿いには、貸自転車と並んでいた。これもQRカードで実に簡単に利用できる。自動車の完全無人運転よりも都市部の渋滞を緩和するのに乗り合いや共同利用できる自転車・電動カートなどの普及の方が先ではないだろうか。以前に京都市中に在住している際、日曜祭日は車が機能しなかった。道幅の狭い古い町並みでは自家用車や他府県からの乗り入れを禁止し、郊外（市中へのアクセス地点）で共用できる乗り物に乗り換える必要性を痛感した。これに対応するには、駐車場の確保が必要となるが、それが非常に難しいなどと説明される。しかし、結局、「やる気」の問題ではなからうか。不都合が出ることも当然予想される。しかし、ある程度試行する中で解決してゆくという姿勢がなければ、なにも成就しない。日本では負の面に対し、ことさら慎重というよりは、すぐに対応すればいいことに対し、失敗を恐れると共に先送りの口実に使っていることが多すぎる。「誰でも先に空腹を満たせるものから飯を食え」といった中国の先人の考えが結局正しかったように感じられる。一人っ子政策も一段落し、人口急増の危機を脱している。人権問題であることは分かっているが背に腹は代えられない。「気が付いた時に改めよう」、「新しい道を探るためには、失敗を恐れぬ」こういった中国の姿勢に学ぶことが

多い。20年、30年後に我が国は彼我の違いを知らしめられるであろう。

一方、何を言っても通じない。「やった、やられた」の意識だけでは解決できない問題に対し、どこまで対話が尽くせるか、現在の韓国問題は大きな課題を投げかけている。「和を以って貴しと為す。話せば分かる。」この考えは価値観を共有できる条件が前提となっている。この条件が成立しない場合、空し

い様であっても多様な表現を駆使して発信し続けるしか解決の道はない。慰安婦像問題はもともと意図した政治問題であり、「表現の自由」で議論する問題ではない。悪用あるいは誤用されない毅然とした態度が必要である。

サンフランシスコと蘭州での知見は、あまりにも対照的であった。結局、双方の「心」の問題である。

* * * * *



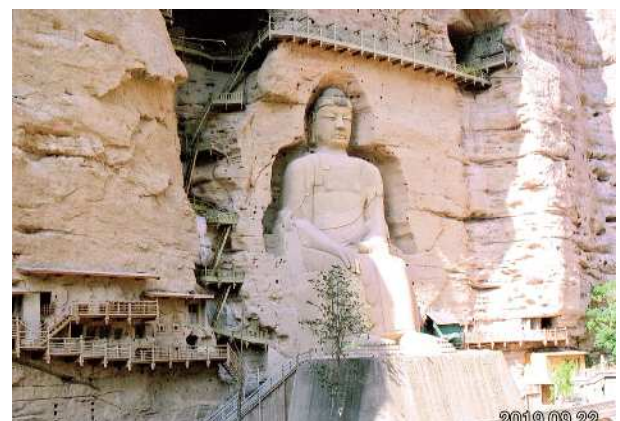
写真一：白塔山から見下ろした黄河第一橋として知られる「中山橋」(1907年架橋)。蘭州市は、この黄河を挟んで南側(右岸)に位置する谷間の細長い都市で、シルクロードの中継地として栄えた。河西回廊は、蘭州から西方に伸びる。その起源は、121BCに「金城」として始まる。隋の時代に「蘭州」と改称。現在の人口は、400万人を超える工業都市。黄土高原を流れる黄河は、まさに黄土色。



写真三：最終日の講義終了時に撮影。当初26名の出席であったが、厳しい講義を生き抜いた17名の大学院生達。将来の活躍が期待される。



写真二：蘭州大学正面。一步踏み入れると都会の喧騒がかき消され、一転して静かな雰囲気に代わる。卒業生すべての名前を刻んだ碑が印象的であった。



写真四：蘭州から南西約100kmにある炳靈寺摩崖仏(唐代。高さ27m)。自然の洞窟の中に、西秦・北魏から1000点を超える石像・塑像・壁画が残されている。劉家峡ダム建設(1967年)により渡船が必要となった。



写真-5：蘭州駅前天水南路沿いにあるレンタサイクル施設。QRコードを画面に当てるだけで簡単に使用できる。きわめて便利。



写真-6：重慶西方180kmにある「大足石刻群」の一つ。晩唐・五代・北宋時代の15万体の色彩鮮やかな石刻群が残されている。1999年世界遺産。必見。筆者は現在、敦煌研究院・中国文化遺産研究院・蘭州大学と共に、岩石風化の見地から石像群の保全に鋭意取り組んでいる。

